

再編と多様化、または、新たな主体の発明

——王夫之研究の現状と課題——

本間 次彦

一 王夫之研究の新たな動向

王夫之について一冊の書物を書くことは何であるか。もちろん、それは、王夫之とは何者であるかという問いを引きつけることであり、そして、問いの引きつけ方は、大きく二つに分けられるだろう。

一つは、彼の生きた時代と彼の具体的な経歴の相関関係に注目するところから、問いに向かいあおうとする立場である。その場合、「王夫之とその時代」をテーマにした、伝記風の、または、評伝風の叙述が成果として残されるだろう。

あるいは、膨大な著作を残した作者としての彼に特に注目し、彼の執筆活動を主導する動機が何であったかという点に焦点をしばるところから、問いを組み立てることもできるだろう。明末清初という危機の時代において、過去の知的伝統に向きあい、それらを総括し、批判的に継承することを目ざした人物。また、実際に、知的伝統を構成するほとんどすべての領域にわたって膨大な著作を残した人物。それが、王夫之だからである。

もっとも、両者の立場は排他的なものではない。一冊の書物の中にこれら二種類の叙述が共存することはごく自然なことであるし、両者の間では、他方の立場から生み出された成果を相互に吸収しあうことで自らの立場を補強することも当然ありうるからである。両者の立場を区別することは、したがって、あくまで暫定的なものにすぎない。ただ、二つの立場の違いにこだわることで見えてくるものもある。中国の知的伝統の批判者であり、継承者であるがゆえに、膨大な著作の作者でもある王夫之。このような意味での作者である王夫之に対する関心が、近年の王夫之研究を特徴づけているように思われるからである。

現在行われているそのような研究は何を明らかにしているのか。王夫之を語る新たな言葉はそこに見出されているのか。また、その課題はどこにあるのか。最新の研究動向に関してこのように注意を向けることは、ごく常識的なものであるだろう。ただし、そこには地域的な限定が付されなければならない。ここで注目する研究動向は、あくまで中国語圏（実際には、ほとんど中華人民共和国内）に限られるという

ことである。それは、基本的には、中華人民共和国版の思想史が与える、前近代思想の最良の総括者としての位置づけが、中華人民共和国内で大量の王夫之研究を生み出してきたことに関わっている。

しかし、地域的な限定の理由はそれだけではない。そもそも中国語圏を除く他の地域において、王夫之研究の近年の動向を問題にすることにどの程度の意味があるのか。このことがまず問われなければならないだろう。日本は、中華人民共和国には遠く及ばないまでも、王夫之関連の研究業績の量では中華人民共和国に次ぐ位置にある。その日本ですら、王夫之研究の現状といえは、単発の関連論文が相互にゆるやかに連携しつつも、断続的に、また、散発的に発表されている程度にすぎない。つまり、日本語文献に関して、王夫之研究の動向をさぐること自体がほとんど意味をなさないということである（もちろん、論文個々の質については、別途論じられるべきである）。ついでに言うなら、日本においては、王夫之の全体像の提示を意図するような専著はかつて一度も書かれたことがないし、この数十年間に刊行された王夫之関連の書籍、または、王夫之に言及する頻度の高い書籍にしても数えるほどしかない（1）。それが現状である。

それに対して、この十年ほどの間にもすでに二十冊近い王夫之関連の研究書が刊行されている中華人民共和国内の状況はまったく異なる。それだけの量の研究書の刊行が近年相次いでいるということは、最近の研究動向についてだけ言っても、すでに質的な検討が必要とされるような段階にあると予

想されるからである。本稿が目ざすのは、まずは、そのような最近の研究動向を検討し、その傾向性を分析することである。その際には、近刊の研究書がどのような方法と視角で王夫之に対しアプローチしようとしているかを注目することになるだろう。つまり、それらの方法論的特徴とその可能性について、主に検討していくことになるだろう。また、その延長線上に、中国語圏における王夫之研究の今後の課題が考察されることになるだろう。いづれにしても、王夫之研究が活況を呈しているかに見える中華人民共和国内の近年の状況に対し、日本の一研究者としてしかるべく応答すること、これが本稿の最大の目標である（2）。

ふりかえってみるなら、改革開放政策が推進され始め、学術書の出版点数も急増した八十年代が、王夫之研究にとつてもやはり画期的な時期であった。唯物弁証法や史的唯物論を主たる方法論とすることで従来の研究スタイルを継承しつつ、他方で、伝統思想の完成態でもあり、同時に、伝統思想の矛盾の最終的な帰結点でもあると想定される王夫之思想の可能性と不可能性をあらためて体系づけるために、新たな角度から照明を当てる研究が連続的に発表されていたのが、この時期である（3）。

それと対比するなら、最近の新たな局面を方法論的に特徴づけるのは、次の二点である。（一）唯物弁証法や史的唯物論といった、かつての正統的な方法論によってではなく、実証主義的な研究姿勢に基づいて王夫之思想の多面性を検証しようとしていること。（二）現代の欧米思想・哲学の動向に

影響を受けていると思われる一部の例を含め、全体として、王夫之の思想を分析する枠組みに新機軸を打ち出そうとする傾向が強いこと（もつとも、欧米思想・哲学からの影響といつても、それによつて分析枠組みの選択が決定的に左右されているということではない。この点については、今回は特に立ち入るつもりはない）。一般的に言つて、このような特徴を有する近年の研究は、八十年代およびそれ以降の研究（以下、本稿で「従来の研究」というときには、これらの研究が指示されている）を踏まえながら、さらにその先に行こうとしていることは確かである。ただし、そのような企てが実際に成功しているかどうかは、また別の問題である。王夫之の研究の現状を分析し、その課題を考察する作業の過程で、その点も検証されるだろう。

ところで、中華人民共和国内で近年王夫之の研究が再び活況を呈していることに關しては、そこに何か特別な理由を見つけることができるだろうか。おそらくできる。そのすべてではないにしても、その主たる要因なら、明確に指摘することができるだろう。一九八八年二月から一九九六年十二月に至る「船山全書」全十六巻第一版の刊行が、それである（4）。「船山全書」の刊行以降、王夫之の研究をとりまく状況は一変し、まったく新たな局面を迎えている、と言つてもいいかもしれない。つまり、こういうことである。

中華書局などが刊行してきた一連の標点本テキストは、王夫之研究が依拠すべき標準テキストとして広く受け入れられてきた。しかし、これらの標点本テキスト群の中には、王夫

之の全著作が収録されていたわけではない。そこに収録されていたのは、当然、より重要度の高い著作であつた。言い換えるなら、従来の王夫之研究の基準からすれば、周縁的ともいえる諸著作が一方に存在していたということである。「船山全書」の刊行が画期的であつたのは、それら周縁的ともいえる諸著作を含めて、現存するすべての王夫之の著作が、信頼のおける標点つきテキストの形態で研究者に提供された点にある。「船山全書」刊行以降、王夫之の研究が取りあげる著作の幅は間違いなく以前より広がっているし、当然そのことは研究自体のかつてない多様化、しかも実証性に伴われた多様化をもたらしてもいる。

二 王夫之研究の現在

それでは実際に、近刊の研究書を以下に概観してみることになしよう。ここで取りあげることになるのは、合わせて十六冊である。それらを、内容に従つて系統別に分類していくなら、このように整理できるだろう。

まず、詩学・美学關係を一つにまとめる。近年刊行が相次いだ詩学關係の著作と、詩学に關わる内容を含む美学關係の著作がここに含まれる。それ以外の著作は、哲学・思想關係として一つにまとめる。哲学・思想關係の著作については、總論的著作と各論的著作に二分することができるし、各論的著作は、さらに、内容に従つて「四書解釈」、「礼学」、「法律思想」、「歴史哲学」、「易学」に区分される。

1 詩学・美学関係

まずは、詩学・美学関係のグループから、詩学関係の著作として、陶水平『船山詩学研究』（中国社会科学出版社、二〇〇一年）を取りあげる。本書は、『船山全書』刊行後に、『船山全書』収録の詩論関連の著作を初めて網羅的、系統的に参照し、また、引用して書かれた、という点で特筆すべき著作である。一九八一年刊行の戴鴻森『薑齋詩話箋注』（人民文学出版社）は、その「箋」の部分に、すでに『古詩評選』『唐詩評選』『明詩評選』を大量に引用することで、『薑齋詩話』からの引用にとどまらない、『船山詩学』研究の将来的な方向性を明確に示していた（戴鴻森の「後記」は、実際の執筆が、刊行のさらに二十年近く前にさかのぼることを記している）。三『評選』からの引用箇所や参照箇所を明示する『船山詩学研究』の圧倒的な量の注は、『薑齋詩話箋注』刊行以来の課題が二十年後に初めて本格的に取り組まれたことを示している。そして、この意欲作が目ざそうとするのは、儒教的文脈における伝統詩学の一集大成であり、かつ、中国詩学の伝統の一到達点である『船山詩学』に対し、総体的かつ体系的な記述を展開することである。

多岐にわたるその記述の歩みを、評者の言葉で要約するなら、このようになるだろう。

詩はなによりも「情」を表出するものであるが、詩の形態を通じて表出される「情」は、詩作品を享受する過程を通じて喚起される「情」と同様に、すでに単なる「情」ではなく、「性の情」へと転化している。つまり、詩を詠み、詩を

読む過程で、「情」は「性」へとつねに本質的に関係づけられている。その意味で、詩は作者と読者をつねに「性」へと間接的に回帰させる。詩に期待されるこのような教育的効果が、儒教的な文脈において、詩に価値を与えることになる。

しかし、これはあくまで本来の詩について言えることである。正しく書かれた詩は正しく読まれうるが、詩は本来の詩として書かれるとは限らない。むしろ、本来の詩からの逸脱が詩の常態であるかもしれない。むしろ、詩はどのように書かれるべきであるか。まず、詩的叙述の過程において、「情」は「景」（詩的イメージであり、詩的叙述の直接的な対象でもある）とつねに同伴しなければならぬ。そして、その両者を共存させる場であり、同時に、相互転化させる場でもあるのが「現量」（「直接的知覚」を指示する唯識の術語を転用して、王夫之はまったく独自の意味を与えている）である。この三位一体が詩的叙述の真实性を支える。また、詩的叙述の真实性が担保される限り、そこには意図せずして、音楽性と修辞性と象徴性がつねに同伴していくだろう。これが詩の理想である。詩の歴史に即して言うなら、『詩経』や漢代の古詩は別格として、このような詩の理想に最も近いのは、明の擬古派が目標とするような「盛唐」の作風ではない。「晋宋風流」派、なかでも、謝靈運である。

『船山詩学研究』の多岐にわたる記述を、以上のように整理してみた。その特徴はどこにあるのだろうか。まず、指摘できるのは、『船山詩学』の体系を構成する要素として認定される諸論点と、それら論点に対してなされる各論自体に特

別の目新しさはないことである。ただし、『船山詩学』に関わる新たな論点は提起されていないとしても、本書には別の意味での新しさがある。それは、既存の論点の扱い方を洗練させ、また、深化させることで、論点の射程を新たに拡張したことであり、また、そのことにより、論点間の新たな結びつきの可能性を『船山詩学』体系として浮かびあがらせたことである。つまり、本書にこれまでの研究と一線を画す点があるとすれば、各論をかつてない水準できわめて詳細に展開することにより、既存の各論を総合した『船山詩学』体系を新たに再構成した点に求めることができるだろう。なかでも、各論レベルの記述の詳細さは、『船山全書』刊行後の段階に要求される研究水準を模範的に示すものである。

詩学関係の著作としては、他に、崔海峰『王夫之詩学範疇論』（中国社会科学出版社、二〇〇六年）、蕭馳『抒情伝統与中国思想——王夫之詩学発微』（上海古籍出版社、二〇〇三年）が挙げられる（蕭馳は、シンガポール在住の研究者である）。『船山詩学研究』が体系性の構築を志向するのとは異なっており、この画書は、『船山詩学』を構成する既存の論点の彫琢と拡張とともに目ざしている。同様の特徴は、呉海慶『船山美学思想研究』（河南人民出版社、二〇〇四年）についても指摘できる。いずれの著作も、『船山詩学』を考察する際に留意すべき点を再確認させてくれる点で有益であるが、その有益さは『船山詩学研究』とあわせ読まれるときにおそらく最大となるだろう。

そのうち、『抒情伝統与中国思想』は、『船山詩学』が詩的

叙述の過程において「情」「景」相即の原理を強調する理由を、このように解釈している。『船山詩学』において、詩的叙述は、より根源的な「天」「人」間の存在論的かつ倫理的な関係の中にすでに位置づけられているからである。これは、当然の解釈である。なぜなら、詩の本質を「性の情」の表出と考える王夫之からすれば、詩を通じて「人」はつねに「性」へと関係づけられ、その「性」を経由することでさらに「天」「人」間の固有の相関関係へと関係づけられていくはずだからである。言い換えるなら、「情」「景」相即を起動させる「現量」の活動と、そこから派生する詩的叙述の過程を通じて、「人」はつねに詩的イメージの根源であり、かつ、自らの倫理性の根源である「天」へと関係づけられていく、ということである。この点を付言しておく（5）。

詩学・美学関係の著作の最後に、韓振華『王船山美学基礎』（四川出版集團巴蜀書社、二〇〇八年）を取りあげる。前記の呉海慶『船山美学思想研究』は、表題では「美学思想」をうたいながら、そこで実際に考察される諸論点は直接または間接的に「詩学」に関わるものであった。それに対し、本書は、「身体」と「解釈」をキーワードに王夫之の「美学思想」を明らかにしようとする。『抒情伝統与中国思想』にも一部通じるその構想の要点は、このように整理できるだろう。

「人」は「天命」を自らの「性」として享け、その「性」を通じて、「天」との間に固有の関係が結ばれている。そのとき、「身体」とは、「天」「人」間を貫く気の運動が個別的に

展開される場であり、そこにおいて「天」「人」間の関係は、「天命」が「性」へと置換される連続的な授受の過程として現象する（「命日受、性日成」）。ただし、「人」は、または、「身体」はただ受動的な立場におかれているのではない。なぜなら、この「身体」は、「天」「人」間の関係を「人」の側から積極的に「解釈」する主体として立ち現れるからである。この世界を、この世界に存在するすべてを、すべてのテクニストを正しく「解釈」し、その「解釈」を具体的な行為のうちに正しく表現するところに、「身体」の本領がある。つまり、「解釈」し、表現する主体という意味では、この「身体」はつねにある種の審美的主体である。他方で、正しく「解釈」し、正しく表現する主体という意味では、この「身体」はつねに倫理的主体でもある。詩的創作も詩作品の享受も、当然、このような審美的かつ倫理的「身体」の「解釈」行為の一環にほかならない。

『王船山美学基礎』は、王夫之の「美学思想」の基礎に、「天」「人」間の関係を主導的に「解釈」し、表現する審美的かつ倫理的な「身体」の存在を見出した。それに対し、哲学・思想関係の総論的著作が見出そうとしているのは、また別の主体である。

2 哲学・思想関係

ここで言う総論的著作とは、張立文『正学与開新——王船山哲学思想』（人民出版社、二〇〇一年）、劉梁劍『天・人・際——对王船山的形而上学闡明』（上海世紀出版集團、二〇

〇七年）、陸寶『回歸真實的存在——王船山哲學的闡釋（第二版）』（復旦大學出版社、二〇〇七年）である。三書とも相應の特徴をそれぞれに有しているものの、一方で、彼らが王夫之の「哲学思想」に読みこむ、「哲学思想」の理想的担い手としての主体像は奇妙なほどに一致している。『王船山美学基礎』が見出した審美的かつ倫理的主体から、その審美性を脱色した主体像が、それである。「天」「人」間の関係を「人」の側から主導的に「解釈」するところまでは同じでも、その「解釈」はもはや審美的に表現される必要はなく、ただ正しく表現されればよい。見出されるべきは、倫理的主体だからである。このような倫理的主体を軸に王夫之の「哲学思想」を描くことは、従来の王夫之研究の典型なスタイルであった。従来のスタイルの延長線上に王夫之研究はどこまで先に進めるのか、この点の確認を読者個々にせまり、また、王夫之研究者でもある読者に対しては、自らの研究スタイルの反省を同時にせまるという意味で、上記の三書は大いなる試金石である。

従来のスタイルの延長線上に位置する研究という点では、哲学・思想関係の各論的著作のうち、王夫之の四書解釈に関連する三書についても同様のことが言えるかもしれない。

陳来『詮釈与重建——王船山の哲学精神』（北京大学出版社、二〇〇四年）は、全体の約三分の二の部分で、『説四書大全説』に主に依拠しながら、王夫之の四書解釈に関わる諸論点を分析し、残りの三分の一で『思問録』や『正蒙注』に論及している。王夫之のこれらの著作は、彼の「哲学思想」

を論ずる従来の研究にとつても、『周易外伝』や『尚書引義』と並ぶ最も重要な分析対象であった。これらの著作を再度取りあげ、奇をてらうことのない篤実な分析を加えること。その際には、従来の研究の偏りと不足を是正し、補正すること。最終的に個々の論点につき現時点で可能な到達点を確定すること。これがこの書の手法である。ある意味では、『詮釈与重建』は、その有用さゆえに、読むというよりは、より多く参照すべき書物である。

季蒙『主思的理学——王夫之的四書学思想』（広東高等教育出版社、二〇〇五年）と周兵『天人之際的理学新詮釈——王夫之の《読四書大全説》思想研究』（四川出版集團巴蜀書社、二〇〇六年）は、いずれも『読四書大全説』を対象に、かつてないほどの集中的な読みこみを行っている点に特徴がある。その読みこみを通じて、『読四書大全説』の本来分散的な記述は再編され、再構成され、体系化されていくことになるし、従来の研究が『読四書大全説』の中に読みこんできたさまざまな論点も、やがて、その体系の下に集約的に統合されていくことになる。両書の再構成の手法には、もちろん、それぞれの独自性があるものの、『読四書大全説』のテキストの背後に潜在的な体系性を仮定し、その体系性の下に既存の諸論点を包摂するという志向は、まったく共通である。見出されていく体系と諸論点の相互関係に注目しつつ、両者それぞれ の妥当性について再度考察すること。上記の仮定と志向に導かれて書かれた、両書を読もうとするとき、読者にはこのような作業が課せられるだろう。

哲学・思想関係の各論の中には、「礼学思想」や「法律思想」を新たな分析視角として採用することで、従来の王夫之思想に関わる広範な個別研究を独自に再編して、新たな体系化の可能性を示しているものもある。陳力祥『王船山礼学思想研究』（四川出版集團巴蜀書社、二〇〇八年）や夏青・劉伯蘭『王夫之法律思想研究』（中國人民公安大学出版社、二〇〇七年）である。ついでに言えば、『王夫之法律思想研究』が主として引用する資料が、従来から王夫之の主著の一つとして位置づけられてきた『讀通鑑論』であるのに対し、『王船山礼学思想研究』が、かつては周縁的な著作にすぎなかった『礼記章句』を数多く引用しているあたりに、「船山全書」刊行後の状況の変化をうかがうことができる。

他方で、従来からある「歴史哲学」や「易学」といった各論の領域に、独自のアプローチを通じて新機軸を打ち出そうという試みも見られる。鄧輝『王船山歴史哲学研究』（岳麓書社、二〇〇四年）、陳連寧『中国古代易学発展第三箇円圖的終結——船山易学思想研究』（湖南大学出版社、二〇〇二年）、汪学群『王船山易学——以清初學術為視角』（社会科学文献出版社、二〇〇二年）などである（6）。ここでは、後者の試みについて多少たちいった検討を加えてみる。

まず、『王船山歴史哲学研究』である。この書が描きだそうとするのは、このような構図である。この世界を構成する自動的・自律的な気の運動とその秩序（「天」）は、時間性の契機（または、変化の契機）をあらかじめ組みこんでいることによって、本源的な歴史性を伴っている。ただし、この本

源的な歴史性は、気の運動の自動的・自律的な展開の過程（「天」）においては、あくまで潜在的なもの、秘められたものにとどまる。「天」は自らの歴史性を自ら明るみに出すことはできないからである。潜在する歴史性は、それではどのようにして顕在化するのか。当然、「人」によつてである。この世界に関与し、「天」「人」間の固有の関係を「人」の側から積極的に「解釈」し、再構築しようとする主体によつてである（7）。このとき、「人」は、この世界に関与し、それと同時に、「天」「人」間の固有の関係を「解釈」し、再構築することを通じて、一方では、歴史を創造する主体となり、他方では、歴史を「解釈」し、歴史を執筆する主体となる。そして、このような主体の登場を可能にする条件は、「性」を通じて結ばれている「天」「人」間の固有の関係によつてあらかじめ用意されている。つまり、この主体は、さらに、倫理的主体でもある。

先に指摘したように、『王船山美学基礎』は、王夫之の「美学思想」の基礎に、「天」「人」間の関係を主導的に「解釈」し、表現する審美的かつ倫理的な主体の存在を見出していた。それに対し、『王船山歴史哲学研究』が王夫之の「歴史哲学」の基礎に見出そうとするのは、歴史的（「解釈」し、また、創造するという二重の意味で）であり、同時に、倫理的でもある主体ということになる。換言するなら、哲学・思想関係の総論的著作が王夫之の「哲学思想」造形の際に主体モデルとして前提するのが倫理的主体であるとすれば、各論の領域に入っていくにつれて、基本モデルとしての倫理的主体は随時特殊化され、その特殊化にそれぞれの著作の個性が反映されていく、ということである。

易学関連の著作についても見ておこう。もともと、その前に、王夫之の『周易』関連の著作を貫く主題を確認しておいた方がいいかもしれない。それは、おそらくこのように要約できるだろう。この世界を構成する自動的・自律的な気の運動の秩序、つまり、「天」の秩序とはどのようなものであり、また、「人」はその秩序に対してどのように関与すべきなのか。王夫之は「歴史哲学」の領域とも交わるこの主題を、『周易』と関連づけながらどのように展開したか、また、そこに彼の易学の独自性がどう形成されていったか、これらの点につき、『中国古代易学発展第三箇円圈的終結』と『王船山易学』はともに従来の研究を咀嚼しつつ、巧みに整理している。特に、『王船山易学』における諸論点整理の詳細さと明快さは、この書に『王船山易学』の便覧的な性格を与えている。付言するなら、両書ともに、早くから標点本が刊行され、早くから数多く引用されてきた『周易外伝』はもちろん、『船山全書』第一冊に収録された『周易内伝』などもごく自然にかつ大量に引用し、参照している。これも、『船山全書』の刊行がもたらした変化である。

三 残された課題

以上に取りあげてきた十六冊が示す特徴を概括するなら、このように言えるだろうか。

それらの著作においては、研究対象や手法の多様化が進行

している。その一方で、それらの著作の多くでは、従来の研究を参照し、集成し、再編することが企てられてもいる。

先行研究の参照に並行する特徴としては、研究史的な整理や参考文献の明示が、それらの著作の多くでなされている点を挙げることもできる。研究史的な整理や参考文献の明示を行うことが、つい十数年ほど前までの中華人民共和国では（少なくとも、哲学・思想研究分野では）、必ずしも常識ではなかったことを考えれば、隔世の感がある。

ただし、課題が残されていないわけではない。近年の著作は従来の研究成果を生かしつつ、それらを新たな組み合わせの下に語り直す点に創意を発揮している。既存の素材の特性を新たな調理法で再活性化していると言ってもいいだろう。言い換えるなら、目新しさの一方で、素材の選択に関しては例外保守的でもある、ということである。もともと、実際のところ、王夫之の研究にはこの方向性しか残されていないのかもしれない。つまり、王夫之の研究はすでに袋小路に入ってしまったているのかもしれない。しかし、今であれば、素材を選び直す新たな目を獲得することを目ざし、そこに活路を求め、することもできるのかもしれない。王夫之を語る新たな言葉を発明しようという試み、その可能性なお賭けてみることもできるのかもしれない。つまりは、これが残された課題である。もちろん、これは、中華人民共和国内の研究者（あるいは、中国語圏の研究者）に限らず、広くわれわれに対しても開かれた課題である。

注

(1) 王夫之の著作から必要に応じてその一節を引用したり、王夫之に対して比較的短い記述で概括的な整理をしているものであれば少なくはない。しかし、王夫之、関連の書籍と呼べるものに限れば、列挙できるのは、高田淳の『王船山詩文集——修羅の夢』（東洋文庫）三九三、平凡社、一九八一年、『易のはなし』（岩波新書）、一九八八年、『王船山易学述義（上）（下）』（汲古書院、二〇〇〇年）程度である。このうち、『易のはなし』は、全体の三分の二ほどが「王船山の易論」に基づいて書かれているし、大著『王船山易学述義（上）（下）』では、『周易外伝』の「訳解」を中心に「王船山の易論」が総合的に検討されている。

翻訳についても、先の『王船山詩文集』を除くなら、『明末清初政治評論集』（中国古典文学大系）五七、平凡社、一九七一年）所収の『説通鑑論』の抄訳が挙げられる程度である（もともと、戦前には、『国訳漢文大成』シリーズの中で、公田連太郎訳『説通鑑論』が刊行されている）。

日本語で読める書籍として他には、フランソワ・ジュリアン『勢 効力の歴史——中国文化横断』（中島隆博訳、知泉書房、二〇〇四年）を付け加えることもできる。この書では、特に第六章から第八章にかけて、「勢」の活用という観点から、王夫之の詩論や史論が言及されている。

(2) この十年ほどの間に中国で刊行された主要な研究書はほぼ入手しえたと考えるが、一部の研究書については、版元の品切れなどの関係で残念ながら手にすることができなかった。

(3) この時期の研究成果を代表するのは、やはり、湖南人民出版社が一九八二年から一九八七年にかけて刊行した『王船山研究叢書』（『王船山伝論』、『王船山認識論範疇研究』、『王船山弁証法思想研究』、『王船山學術思想討論集』、『王船山歴史観与史論研究』、『王船山經濟思想研究』）であると言つていいだろう。

(4) 一九九六年十二月に第十六冊が刊行されて、『船山全書』全十六巻は完結した。なお、第十六冊には「船山全書第一至第十五冊（第一版第一次印刷本）勘誤表」が巻末に付されている。一九九六年十月に一挙刊行された第一冊から第十五冊までの第一版第二次印刷本では、第一次印刷本段階での誤植が「勘誤表」にしたがつてすでに訂正されている。

(5) 評者もかつて、王夫之の詩論を扱った論文を書いているが、その論点は『抒情伝統与中国思想』に一部重なるところがある。詳しくは、拙稿「王船山の詩論をめぐって」（『日本中国学会報』第三十九集、一九八七年）を参照されたい。

(6) 陳遠寧の著書の表題に使われている「中国古代易学發展第三箇円圈的終結」とは、現行の『周易』誕生に至るまでの第一の円環の時代、漢代から唐代に至るま

での第二の円環の時代に続いて、最後に登場する第三の円環の時代の完成者が王夫之であるということを示すものである。

(7) このような構図は、基本的に、林安梧『王船山人性史哲学之研究』（東大圖書公司印、一九八七年）の描く構図に共通する。林安梧は台湾の研究者である。